

釣れ釣れなるままに

2000年思い出の釣行記 PART. 3

脳裏に焼き付いて 離れぬ奴

鹿島釣狂



釣遊会第3回大会

☆開催日	平成12年6月4日
☆開催場所	歌別川～岬港
☆入釣場所	東歌別
☆潮	満潮 03:06 153cm
	干潮 10:32 -5cm
☆釣果	カジカ 322mm 2
	アブラコ 400mm 8
	ハゴトコ
	タコ 1
	重量 3380g
☆成績	合計 1110点
	成績 3位
	累計点 19点

見透かされたウン

第1週の土曜日は、本来ならば稼業日であるが、前週の土曜日に出勤したこともあり、振替休業日となっている。会議も入っていない。大会の日曜日には前任の職場から祝賀行事の案内状が届いているが出席できないことは伝えており、代わりにビール1箱を送っておいた。役所に文書を届けに行った折に後任の職員とばったり出くわした。祝賀の案内は戴いたが当日は大事な会議が入っており出席できない旨を伝えると、素直にそのまま受け取ってくれた。折角の案内に「釣り大会参加のため」とは言えずにいた。

夕方、釣った魚の重さを比べるために天秤ばかりを自作しようと金物屋で素材を物色していると、やはり前職場の女性職員が声をかけてきた。同じように重要な会議が入っており出席できない旨を伝える。しかし、彼女は「その会議とは釣りなんでしょう」と3年間同じ釜の飯を食ったこちらのことはすでにお見通しであった。

自作天秤と農協所長

前回の大会は1点の差で順位が入れ替わっていたこともあり、今回は天秤ばかりを準備することにした。金物屋で適当な材料を見繕う。5ミリのステンレス管の中央に鑢で擦って穴を開けようと画策するも失敗。ステンレスは思った以上に硬いものである。僅かについた傷の様な小さな溝にテグスを縛りつけ、そのテグスに手に持つ紐を括りつける。両端は空洞なので8号のテグスを通し、魚を掛けやすいように移動式にする。テグスの両先にはソイ針をつける。このソイ針は就職したての若かりし頃、その職場に隣接する農協の釣りキチ所長に譲り受けた代物である。

私が海釣りを始めるきっかけとなったのはその所長である。気さくな所長であり、その

農協の事務所で僻地に赴任した職場での寂しさを酒で紛らわす事が度々であった。農協支所の小さな事務所は、農家のおやじたちの溜まり場ともなっていた。一人が1升瓶の酒を買う。同じように他の者が買った干物を酒の肴にして飲み始めるのである。何人いても平等に酒がふるまわれる。残った酒は事務所にストックすることになるのだが、ストックされた酒などは見たためしがなかった。そして、暗黙の掟があるのか、誰も2本日を買うものはいなかった。

その所長が、赴任して間もない私を海釣りに連れて行ってくれた。竿やリール等も含めて道具類は全て所長の物を使わせていただき、エサまで用意してくれた。場所は余市方面だったと思うが定かではない。港から突き出た低い防波堤から高くなった波除けの向こう側に仕掛けを投げ入れるのである。初めてでもあり、どこに投げているのか皆目見当がつかず、隣の人とお祭りしては何度も頭を下げた。それでも、海釣りは全くの初心者である私にも何匹かホッケやカレイが釣れて来た。

少し投げられるようになると今度は、町の釣り大会と一緒に参加させていただいた。場所は静内の砂浜である。時化気味の海に向かって投げたのだが未熟な私は今から思えばほんのちょい投げだったのだろう。アカハラやハゴトコが何匹かかかり、後ろの方ではあるが賞をいただいた。

そうになると道具が欲しくなる。その所長に相談すると全て譲ってくれるという。自分はゴルフをするので釣りは止めるというのだ。そのころでは珍しい4人乗りのゴムボートをはじめ、竿・リール・小物類一切を私に譲ってくれた。金額は1か月の給料全てをはたいた。よくよく考えると、それは始めからの所長の作戦であり、自分が釣りに飽き、ゴルフの道具を揃えなかったからと考えるのは穿った見方であろうか。とにかく私は海釣りにのめり込んで行くのである。

大きな段ボール箱や両袖のある事務机にびっしりと詰め込まれた小物類の中に、マグロでも釣るのかと思われるような大きなソイ針が入っていた。それは、譲り受けてから未だ使用することなどなかった。

秤には必要のないカエシの部分の部分を削ろうとするが硬く大きいためやはり無理であった。代わりに針先がどこでも突き刺さらないようにと赤のビニル管をつける。ビニル管の先は魚の鰓蓋に掛けやすいようにと先を斜めに切っておく。我ながらすばらしい出来栄であった。(図参照)

隣に来たカジカ

襟裳の大会は東歌別が定番となってきた。今回は高橋氏・荻野氏と同行する。高橋氏は留吉の沢の暗い方向に進んで言った。東歌別の舟揚場についた水銀灯が妙に明るく海面を照らしている。舟揚場の左に荻野氏、右に私が荷物を下ろした。水銀灯の光が届かない防潮堤の陰に打ち込んだ荻野氏の一投目にカジカがダブルで来た。6月の大会は嫁さん探しに苦労するが荻野氏の一投目にカジカが来たので希望が膨らむ。しかし私の方はいくら待

ってもピクリとも来ない。ただただ、針先には緑色の海藻がついてくるばかりである。さらに、カジカやハゴトコを何匹か追加した荻野氏に「何か来たかい」と尋ねられても、こちらは首を横に振り、ただ項垂れるばかりである。

早々に審査規定の5匹を揃えた荻野氏は、余裕が出て来たのか留吉の沢に入った高橋氏の様子を伺いに出掛けて行った。しかも、のんびり帰って来た荻野氏は潮が引いてからの為の体力とエサを温存しているのか、ほとんど打ち返していない。

私はエサだけは十分用意して来たので次から次へと打ち続けた。2時半頃ようやく待望の大きなアタリが来た。防潮堤に立て掛けた芋がガタガタと音を立てている。竿先のガクンとした突っ込みに合わせて竿を煽ると、アブラコ独特の感触が手元に伝わってくる。早めに浮き上がった獲物に水銀灯の明かりが届くころもう一度派手な突っ込みを見せたが、後はすんなりと上がって来た。獲物は35cm程のアブラコである。さらに続けてハゴトコに混じって似たようなアブラコが次々と来て4本そろってしまった。後は嫁だけである。

ご老人の指し示す先は

潮が少し引いて来たので荻野氏が海面から突き出た岩を渡り始めた。私も周りの様子が気になり始める。そこへ、薄明るくなって来た海を眺めに一人のご老人がやって来た。足が不自由なのか体を上下に揺らして一步一步ゆっくりと近づいてくる。ボシヤボシヤと短く刈り上げたゴマシオ頭。永年の漁師生活が深く刻み込まれた顔には不釣り合いながっしりとした上腕は、若かりし頃の労働を偲ばせる。朝の挨拶を交わした後、ボソボソと語り出した。

「今年の昆布は浜値が高くてノウ。流れ昆布なんジャがキロ800円もスているんだワイ。スカス、もうチットスたら買い手が見つかノウなって値が下がるんジャろう。」

「去年はひんどかったゾウ〜。キロ10円スかつけんかったからノウ。スカモ、去年は漁が薄くてノウ。海がワヤになってきて、昆布の縁が白く栈れるんじゃワイ」

「ワスらの収入の8割がたは昆布にたよっているダァ〜。昔はいいカレイが採れたもんジャがノウ。採りすぎたんジャろう。スカモ、憎たらしいことに韓国船がやってくるようなッデ、根こんそぎ魚を捕っていくもんジャから魚がオランくなってスもうた」

ご老人の語りに真剣に耳を傾けていると、おもむろに指をこちらに向ける。指先に振り返って見ると、竿が海に向かって突っ込みガタガタと鳴り出した。あわてて竿を煽る。待望のカジカだ。30cmは越えているので、嫁のとれないこの時期にしては不満がない。これで2魚種5匹は揃った。

磯周りのエサの威力

私が乗ろうとしている岩の手前には川下釣りクラブのメンバーが二人いる。気になり潮が引いてからの行動を伺うと、違う岩に乗るらしい。他には誰もいない。安心ではあるが早めに乗りたい。ここでは膝以上海に浸かって渡ったことはないが、べた風状態であるの

で腰あたりまで浸かって念願の岩に乗った。佐々木氏の教えにより、渡ることでできるようになった時の周りの岩の状況をつぶさに記憶しておく。そして、次回は潮が引き初めて、その岩が見えるようになった時を見計らって早めに渡る準備を始めよう。

早速、乗った岩の周りに改めてドボン、ドボンと打ち込む。磯ガニが針にかかってきた。エサとして針にかけるには少し大きいので、足を箒り取り半分にして改めてハリにかけ遠投してみた。間もなくその竿にガクン、ガクンとしたアタリがあり、その後はツーンとして道糸を引っ張ったまま動かなくなった。その獲物は40cm弱のアブラコであった。

気を良くして磯ガニの変わりにヤドカリを探す。岩に張り付いている物を裏返してみると全部ツブである。しかし、以前捌いたカジカの胃の中から消化しきれないツブの蓋がたくさん出てきた事があるので、多分カジカの好物なのだろう。ツブのウロを潰さないように殻を割り、針につけて近投する。それをアブラコが食ってきた。40cmは優に越えているであろう。

仇討ち (いつもいるとは限らない)

大事なアブラコを入れようとフラシを引っ張り上げようとするが何やら重い。よくよく見るとタコがフラシに絡みついている。フラシに入れた魚の匂いに負けて岩穴から出て来たのであろう。フラシの中にある獲物を求めて8本の足を絡めている。引っ張り上げるのを止め、そおとフラシを元に戻す。釣り上げたアブラコを一旦岩の上に置き、改めて滑り止めに軍手をはいた。静かに海に入り腰まで潮に浸かりながら、慎重にフラシの横に体を寄せる。フラシを引き寄せながら抱きかかえるようにタコをつかんだ。意図したごとくタコの吸盤がウェイダーに吸い付き、その周りについた昆布をも箒り取りながらやっとおもいで岩盤に這い上がった。

バックカンにタコを収めて、釣り上げたアブラコも収めようと辺りを見るが、そこにははずのアブラコがどこにもいない。タコとのやり取りをあざ笑いながら悠々と海にお帰りになったらしい。

後からやってきた例の(北海道の釣り2000年月号参照)漁師が、例のごとくカギのついた棒をタコ穴に向けて操っている。そして、いつもはこの穴に必ずいるはずのタコが今日はいないと嘆いている。その漁師が採るはずのタコは今回は私のバックカンにしっかりと収まっている。だがその事実を伝えるのをためらった。ウニやアワビ・ツブ等の密猟が

最禁であることを呼びかけているが、はたしてタコはどうなのだろう。密猟になるのだろうか。多分同じだろう。漁業権が設定されているので、魚も同じだと思うが、漁業者の方



で大目に見てくれているのであろう。タコ採りの漁師が言う。今年はタコがよく死ぬ。それは海水が冷たいせいであると・・・。

違う溝でやっていた荻野氏が遠くから叫んでいる。いつもこの溝のこの岩穴にいるカジカがやはり今日も住んでいたとのこと。口では小さいと言いながらも大きさを示す手と手の幅は大きい。

最後に竿を伸した奴は

すっかり陽が昇ってからはアタリも遠くなり、小さなハゴトコばかりが竿を揺らす。締め切り時間が迫り、少し場所を移動して今まで打ったことのない沖根に遠投を試みた。その竿に今までにはない大きなアタリが来た。根回りがきつそうなので、大きく竿を煽った後は高速でリールを巻こうとするがままならない。今まで味わったことのない大物だ。しかし、海が浅いために深く潜りきれないのであろう。奴は右に左に方向を変えながらも少しずつ、少しずつ寄って来た。寄せて来る途中の右側10m程の所にさらし根が見えた。いやな予感がした後、奴は急に方向を転換し、道糸をキーンと鳴らしながら右方向に向かって走る。道糸と海面との境目で飛沫があがる。奴の動きに合わせてさざ波が立つ。ガクンとした竿への感触の後、リールが固まって動かない。締め切り時間が迫っているので焦る。私が左に移動し何とか道糸を繰りながら抜こうとするもうまくいかない。奴が根から出て来るのを待つにはなんぼ何でも時間がない。道糸の力に負けて奴が昆布から抜け出るのを祈りつつ、竿を水平に近くして引っ張った。道糸の力より奴の力の方が勝ったのであろう。ブチンとした鈍い音の後、竿尻が私の腹にドスンと食い込んでしまった。

竿尻が食い込んだ腹の痛みに併せて奴を取り逃がした大きなショックでしばらく放心状態が続く。奴の太く大きな尾鰭が凜として潮をかき分け、頑丈な顎には鋭い歯が剥き出しになっている。そして奴は眼光鋭く私を睨みつける。根に向かって一直線に走った奴の姿が私の脳裏に焼き付いて離れない。

審査の結果

今回の大会ではせっかく用意した例の天秤ばかりを使用することはできなかった。締め切り時間ギリギリまで粘り、暫く続いた放心のため、魚を天秤にかけている暇など無かったのだ。提出すべき魚はどれも似たようなものである。35cm以下のものを除いて35cm～40cmのものを8本選ぶ。太いかジカか、長さでは勝るアブラコの方が。結局、身長に提出する2尾を除いて重量に加える3尾は審査前に私の勘で選定することになった。

果たして自分の勘はいかがなものか。自宅に戻ってから早速、天秤ばかりで確認してみた。一匹一匹重さを比べる。結果、己の勘が素晴らしいものであることが認識できた。適当に選んではいたのだがその勘にくるいはなく、長いものと太っているものの重さは同じであった。

審査の結果は

優勝	島 強二	1 2 2 0 点 (アブ 480+カジ 400+3400)	沖の島
準優勝	岡 英成	1 1 5 4 点 (カジ 391+アブ 390+3730)	東歌別
3 位	鹿島釣狂	1 1 1 0 点 (アブ 400+カジ 322+3880)	東歌別
身長	吉井 博	アブラコ 46.9 cm	

であった。

帰りのバスでは、入賞の喜びよりも脳裏に焼き付いて離れないと逃げた奴の勇姿がまざまざと浮かび上がってくる。奴と再び格闘できることを祈り、これからも暫くは東歌別に通い続けることとなるのであろう。

